OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	トゥルシーダース作『ドーハーヴァリー』
Author(s)	長崎, 広子
Citation	印度民俗研究. 2007, 10, p. 32-46
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/50068
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

トゥルシーダース作

『ドーハーヴァリー』

長崎　広子　訳・注

概要

『ドーハーヴァリー』 *Dohāvalī* は、ヴィシュヌ派ラーマ信仰の聖者トゥルシーダース Tulasīdāsa (1532-1623) によって編まれたドーハー詩形による詩集である。テーマは、信愛、ダルマ、倫理、品行、愛、理性、ラーマの偉大さ、サントの偉大さ、御名の偉大さなど多岐にわたっているが、主として宗教的な内容で、インドの人々の人生の指南書ともよばれている。宗教的に深長な内容が短い詩形で見事に表され、極端に技巧を凝らすことなく自然な文体が用いられていることなどから、本作品中の多くの詩は人口に膾炙しており、一般大衆にも大変親しまれている。

用いられている詩形は二行詩ドーハー (各行は 13 + 11 mātrā、脚韻は—⌣) とその異形であるソールター Soraṭhā (各行は 11 + 13 mātrā) である。作品は、同作者による作品 *Vairāgya Sandīpinī*, *Rāmājñā Praśna*, *Rāmacaritamānasa* からの引用と新作を含む 573 ドーハーからなる。創作時期は、かなりの長期間に及んでいるようで、ヴィクラマ暦 saṃvat 1614 (1557) 年から saṃvat 1680 (1623) 年の間とみられている。

テキストは、Nāgarīpracārinī Sabhā 版 *Tulasī Granthāvalī*, khaṇḍa 2, saṃvat 2015 を使用した。注釈は Gītā Presa 版 *Dohāvalī*[1] と Śrīkānta-śaraṇa 編 *Śrīmadgosvāmī kṛta Dohāvalī: siddhānta-tilaka*, saṃvat 2012 を参照した。

なお、Nāgarīpracārinī Sabhā 版には記されていないが、Gītā Presa 版では記されている小見出しや、解釈上補足的に必要な内容は [ ] で示した。また、本翻訳ではサンスクリットの名称は、潜在母音が脱落する現代ヒンディー語の発音表記ではなく、わが国で馴染みのあるサンスクリットの発音に基づく表記にしている。

[念相]

1. ラーマの左にジャーナキー (シーター) 妃、右にラクシュマナ。この念想は、あらゆる安寧を与え、トゥルシーダースよ、お前にとっては如意樹 (あらゆる願いを叶えてくれる天界の樹木) である。

2. トゥルシーダースは言う。シーター妃とラクシュマナとともにいる主は麗しい。神は喜び、花の雨を降らせる。この有徳のお姿の念想は、吉兆の源。

3. パンチャヴァティー [の森] ではバニヤン樹の下でシーター妃とラクシュマナとともに座す主は麗しい。トゥルシーダースは言う。[この念相は] あらゆる吉兆を与えるもの。

[1] 初版年は不明。使用したテキストは、saṃvat 2056 年、第 40 版。

[ラーマの御名のすばらしさ]

4. チトラクータに主はいつも、シーターとラクシュマナとともに住んでおられる。トゥルシーダースは言う。ラーマの御名は、それを唱える者に望みの果報を与えてくださる。

5. 六ヶ月間ミルクを飲み、果実を食べ、ラーマの御名を唱えれば、トゥルシーダースは言う、すべての吉兆と成就が手に入る。

6. トゥルシーダースは言う。ラーマの御名という美しいともしびを、[口という] 扉の、舌という敷居におきなさい。内と外に明かりが欲しければ。

7. 心には属性のない神、目には属性のあるお姿[2]、舌にはラーマの美しい御名。トゥルシーダースは言う、美しい宝石が金の箱に輝くかのようだ[3]。

8. 属性のあるお姿の念想には愛着を持てず、無属性の神が理解に遠いなら、トゥルシーダースは言う、ラーマの名を唱えなさい。御名は [死者をも] 蘇生させる薬根なのだから。

9. トゥルシーダースは言う、一文字は傘、もう一文字は宝石のように、すべての文字の上に、ラグ族の誉れ (ラーマ) の名の両文字 [ラとマ] はおわします[4]。

10. ラーマの御名は自然数。すべての手段はゼロ。自然数がなければ手には何も残らず、自然数があれば十倍にもなる。

11. ラーマの御名は末世における如意樹。安寧の住みか。念じて、トゥルシーダースは幸運にもトゥルシー[5]になった[6]。

[2]属性のない神とは姿を持たない観念的な神で、属性のある神とはラーマ等のように姿を有してこの世で遊戯を繰り広げる神を指す。

[3]美しい宝石は神を指し、宝石を金の箱にしまっておくというたとえは神を大切にするという意味で用いられている。

[4]デーヴァナーガリー文字で r は半子音字のときにシュローレーカーという横棒の上に書かれ、m は鼻子音を表すときにビンドゥと呼ばれる鼻子音記号の点が用いられ、やはりシュローレーカーの上に書かれることから、ラーマの r と m の両文字が傘と宝石にたとえられている。

[5]カミメボウキ。ヒンドゥー教ヴィシュヌ派で神聖な木とされ、ここでは汚れがなく、人々から崇められる存在としての比喩で用いられている。

[6]「幸運にもトゥルシーになった」という部分は Gītā Presa のテキストでは、「大麻からトゥルシーになった」となっており、ここでは、大麻は忌むべき存在としての比喩で用いられている。

12. 舌でラーマの御名を唱えた人々は、行いが正しく、幸福な者になった。トゥルシーダースは言う、一方怠っている者は、今日明日にも滅びるだろう。

13. 哀れな者に情をかける御名は、[唱名する者を] 民とみなして、王国を与える。トゥルシーダースは言う、なのに [私の] 心は、汚物の中で穀物をついばむ癖を捨てられない。

14. トゥルシーダースは言う、カーシー[7]で決まりにしたがって暮らして身を捨て、プラヤーグ[8]で固い決意を立てて身を捨てて得られる果報は、ラーマの御名への愛着によってたやすく得られる。

15.[貴重な] 甘いものであっても皿一杯得られ、権力と安寧が、私欲と解脱 [という相反するもの] が容易にラーマの御名への愛で得られる。

16. ラーマの御名を念じると、生まれの卑しい者が高名な者となった。大道にある悪い木、汚れた池、悪い (下品な者の住む) 町がこの世で名声を獲得するように。

17. トゥルシーダースは言う、自らの幸福は夢にも得られず、解脱など望むべくもなくても、ラーマの御名を念じれば、辛い苦悩は消滅する。

18. お前はすべてについて「自分のものだ、自分のものだ」と言うが、お前は何者だ、名を名のれ。トゥルシーダースは言う、ラーマの御名の徳をとくと知り、黙っていろ、さもなくばラーマの御名を唱えよ。

19. 我を見て、己の [真の] 姿 (梵) を見よ。我と己の [真の] 姿 (梵) との間に存在する幻影(マーヤー)を見よ。トゥルシーダースは言う、見えないものをどうやって見るのか。ラーマの御名を唱えよ、卑しい者よ[9]。

20. ラーマの御名の助けを借りずに、解脱を望むのは、雲から降り注ぐ雨粒をつかんで、天に昇りたがるようなものだ。

[7]現ベナレスの古名。
[8]現アラーハーバードの古名。
[9]「見えない、見えない」と叫んでばかりいる苦行者に対する教訓として語られている。

21. トゥルシーダースは熱意を込めて毎日語る。心よ、聞け。ためになると思って。ラーマの御名を念ずることは、大きな果報であり、忘れることは大きな損失である。

22. トゥルシーダースは言う。堕落した幾多の生を今日ここで正すことができた。悪い付き合いをやめて、ラーマのものになれ。ラーマの御名を唱えよ。

23. 愛と信念を持ち、規則どおりにラーマのラーマという御名を唱えよ。トゥルシーダースは言う。始まり、途中、最後で、お前[10]に徳が生じる。

24. トゥルシーダースは言う、[唱名の] 味わいと [唱名する] 舌は夫婦、歯は家族、そして口は美しい家。ハラ (シヴァ神) に利益をもたらす [御名のラとマの] 文字は子供で、自然な愛情は財産である。

25. トゥルシーダースは言う、ラグ族の主 (ラーマ) への信愛は雨季。善き僕は稲。ラーマの御名のふたつの尊き音 (ラとマ) は、サーワン月とバードン月[11]。

26. ラーマの御名はヌリシンハ。末世はヒラニヤカシプ。唱名する者はプラフラーダのようなもの。神々に苦しみを与える者 (ヒラニヤカシプ) を倒して守ってくださる[12]。

27. ラーマの御名は末世の如意樹。すべての吉兆の根源。念じれば、手にはすべての達成が、一歩一歩に最高の喜びが得られる。

28. ラーマの御名は末世の如意樹。ラーマへの帰依はカーマデーヌ (あらゆる願いをかなえる牛)。師の蓮の御足の塵は、この世におけるすべての吉兆の根源。

[10]「お前」とトゥルシーダースが呼びかけている相手は、聞き手を指す。

[11]月の運行に基づくインド暦のサーワン月とバードン月は太陽暦の 6、7 月ごろで、雨季にあたる。

[12]悪魔ヒラニヤカシプの息子プラフラーダはヴィシュヌ神に帰依し、父の怒りを買ったが、ヴィシュヌ神の第四権化(アヴァターラ) ヌリシンハ (人獅子) が柱から現れ、ヒラニヤカシプを退治した。

29. すべての大地は種子に満ち、空には星があるように、ラーマの御名はすべてのダルマでできていることを、トゥルシーダースは知っている。

30. あらゆる欲望を離れ、ラーマへの献身の醍醐味に浸る [偉大なる魂を持てる] 者も、御名の愛という甘露の湖で、己の心を魚にかえた[13]。

31.[属性のない] ブラフマンや [属性のある] ラーマよりも、御名は偉大である。恩恵を与える者にまで恩恵を与えてくださるのだから。マヘーシュ(シヴァ神) は、心で熟知し、ラーマの行い（ラーマーヤナ）の 10 億の [シュローカの] 中で、[御名を] 会得した。

32. ラグ族の主 (ラーマ) はシャブリー[14]やジャターユ[15]のような善き奉仕者に解脱を与えた。御名は数知れない悪人を救済した。その徳の頌歌は、ヴェーダで知られている。

33. トゥルシーダースは言う、ラーマの御名に没頭し、ラーマに愛と確信と信頼を寄せる者は、すべての美徳と吉兆の宝庫を念じているのだ。

34. ヴィビーシャナ[16]はランカーを、スグリーヴァ[17]は王位を、ハヌマーンは主を、ジャターユは死を、ラーマから頂いた。卑しいトゥルシーダースは、御名の愛を頂きたい。

35. ラーマの御名はすべての不吉と罪を滅し、すべての安寧をもたらすもの。ハラ (シヴァ神) はいつもラーマの御名を唱え、ヴェーダやプラーナは御名を称える。

[13]魚は水なしには生きて行けないことから、ラーマの御名なしには生きていけないという意味。

[14]シャブリーはラーマーヤナに描かれた山に暮らす部族の女性で、熱心なラーマ信者。彼女が差し出した果物をラーマは食し、シーターを探す手がかりを彼女から得た。

[15]ジャターユはラーマーヤナに描かれた神聖な鳥。魔王ラーヴァナによってさらわれようとするシーターを救出しようとして瀕死の重傷を負い、ラーマによって解脱を得た。

[16]ヴィビーシャナは魔王ラーヴァナの弟であるが、ラーマ軍に加勢し、ラーヴァナが倒された後は、ランカーの都の統治を委ねられた。

[17]シーターを探すラーマと同盟を結んだ猿の王。スグリーヴァはシーターの捜索を請け負う代わりに、妻を奪った兄ヴァーリンの征伐をラーマに依頼し、ラーマはヴァーリンを殺害し、スグリーヴァは猿国の王位を得た。

36. トゥルシーダースは言う、愛と信念をもって、ラーマの御名を唱えるという供儀をすると、創造主は嘉し、不幸な者に幸運を与えてくださる。

37. この世に動くもの、動かないもの、多くの生き物がいる。水に拠り所を、大地に拠り所を、空に拠り所を持つ実に無数の者たちがいる。トゥルシーよ、お前のように哀れな者には、ラーマの唱名がたったひとつの拠り所なのだ。

38. ラーマを頼ることを、ラーマにのみ力があることを、念じれば吉兆、繁栄、壮健が得られるラーマの御名を信じることを、トゥルシーダースは欲す。

39. トゥルシーダースは言う。ラーマの御名に愛を、ラーマに拠り所を、ラーマの御名に信頼を寄せる者は、念じれば、二世(にせ)で吉兆、繁栄、壮健を得る。

[ラーマへの愛なしにはすべてが無意味である]

40. ハリを唱名しない者の舌はメス蛇、口は蛇穴のようなもの。トゥルシーダースは言う、ラーマに愛を抱かぬ者に創造主はそっぽを向かれる。

41. トゥルシーダースは言う、心よ、裂けてしまえ、目はめしいてしまえ。身体は燃えてしまえ。何の役に立つのだ。ラーマを思って心が和まず、涙が流れず、鳥肌が立たないのなら。

42. トゥルシーダースは言う、ラーマを思う時、[クシャトリヤが] 聖戦で戦う時、喜捨する時、師の御足にひれ伏す時、身体が震えない者は、この世でただ生きているだけだ。

43. ハリの徳を聞いて、動かされない心は、棍棒のようなもの。ラーマの徳を唱えない舌は、カエルの舌のようなもの。

44. トゥルシーダースは言う、ラグ族の英雄 (ラーマ) の名声を聞いて愛の涙が流れないなら、そんな目を与えないでください。ラーマよ、どうかめしいにしてください。

45. ラーマよ、あなたの名声を聞いて、涙ですっかり濡れないなら、そんな目には握りこぶしいっぱいの塵をぶち込むべきです。

[懇願]

46. 慈悲の海、ダシャラタ王の息子よ。あなたを念じれば、あなたはそちらを向いて幸福を与える方なのに、どうして私を庇護してくださらないのですか。

[ラーマとラーマの愛のすばらしさ]

47. 主人は召使が罪を犯したと聞くと、怒るものだが、主ラーマは自らその罪を見咎めても、まったく心に留められない。

48. トゥルシーダースは言う、ラーマにとって己よりも召使の意向が好ましいのだから、シーターの夫 (ラーマ) のような主人に、どうして背を向けられようか。

49. トゥルシーダースは言う、内なる心眼と外なる両眼(まなこ)があれば、どうしてケーヴァト[18]を守った慈悲深い御方に背を向けられようか。

50. 主 (ラーマ) は木の下に、[家来の] 猿たちは枝の上にいても、主はそれらを己と同等に扱われた。トゥルシーダースは言う、徳の宝庫であるラーマのような主人は、どこにもおられない。

[目覚め]

51. ああ心よ、お前はすべてに執着を持たず、ラーマへの愛に浸れ。トゥルシーダースはお前に、日に夜にこのすばらしい教えを与える。

52.[木が] 青い時には [動物や鳥が] 食み、[薪として] 燃えると [人は] 火にあたり、実がなると手を差し出して欲しがる。トゥルシーダースは言う、すべての者は私欲を友とし、最高真実を友とするのはラグ族の主 (ラーマ) のみ。

[18]船乗りを生業とするジャーティ。ラーマーヤナではラーマ一行を船に乗せてガンジス河を渡した。

53. シーター・ラーマによってあらゆる私欲は満たされ、シーター・ラーマこそが最高の真実である。トゥルシーダースは言う、他の戸口にお前は何の用があるのか、言ってみろ。

54. ただひとつ (ラーマ) から、私欲も最高の真実も皆得られる。トゥルシーダースよ、他の戸口で哀れみを乞うのはよろしくない。

55. トゥルシーダースは言う、私欲はラーマのためであり、最高真実はラグ族の英雄 (ラーマ) 自身である。その召使は、ラクシュマナや勇者ハヌマーンのような方々である

56. トゥルシーダースは言う、水をのぞけば、魚にとって己も含めてこの世は敵であるように[19]、ラグ族の英雄 (ラーマ) なしには、お前も同じ状態だと知れ。

[トゥルシーダースの願い]

57. ラーマの愛で太り、ラーマの愛がなければ弱ってしまう、ラグ族の誉れ（ラーマ）よ、いつトゥルシーダースをしてくださるのですか、（ラーマの愛の）水に住む魚のように。

[ラーマへの愛の偉大さ]

58. 友がラーマで、拠り所がラーマで、ラーマの御足に喜びを抱く者に、トゥルシーダースは言う、創造主はこの世に生まれる果報をくださった。

59. トゥルシーダースは言う、わが身や己のものよりも、シーター・ラーマを愛する人の足の靴に、この身の皮はなりたい。

60. トゥルシーダースは言う、私欲や最高真理 (解脱) への欲を離れた、シーター・ラーマに対する愛は、四大果報 (財、法、愛欲、解脱) と同等の果報であると、私はこう考える。

[19]己も含めて敵とは、魚は餌に食らいついて自ら釣り針に引っかかってしまうという意味。

61. トゥルシーダースは言う、感覚器官の対象の味わいには無関心で、ラーマの愛に浸った者は、ラーマのお気に入りである。森に住んでいようとも (隠遁者)、家に暮らそうとも (家住者)。

62. どんなものでも得られるものに、満足と喜びを感じ、ラグ族の誉れ (ラーマ) の御足に愛を抱く、そんな心は、トゥルシーダースは言う、馬が蹄で地面をかくようなものだ[20]。森に住んでいようとも、家に暮らそうとも。

63. トゥルシーダースは言う、もしラーマに対して素直な愛を持てないなら、無駄に頭を丸めたことになる。家を捨て、道化になって[21]。

[ラーマに背くことの悪しき結果]

64. トゥルシーダースは言う、聖なるラグ族の英雄 (ラーマ) を捨てて、他を信じる者には、幸福や財産が得られないばかりか、地獄に行っても居場所はない。

65. トゥルシーダースは言う、ハリ (ヴィシュヌ神及びラーマ) とハラ (シヴァ神) を捨てて、卑しい霊を拝む者は、遊女の息子のように哀れな末路となるだろう。

66. シーター・ラーマに奉仕せず、ガウリー・シャンカラ (シヴァ神と神妃パールヴァティー) を称えないのは、よその戸口でごろごろして、ただ生を無駄にするようなもの。

67. トゥルシーダースは言う、ハリを侮辱すると、多くの災いにつながる。統治していたのに、クル族の王 (ドゥルヨーダナ) は、自らの軍隊と一族とともに塵と化した[22]。

[20]馬がつながれて、とんだり跳ねたりして前足を動かしても、位置は不動であることにたとえて、ラーマへの不動の愛を意味している。

[21]冒頭の「トゥルシーダースは言う」を呼格（「トゥルシーダースよ」）ととらえることも可能で、その場合は、この詩句はトゥルシーダース自らに対する戒めの句と解釈できる。

[22]叙事詩マハーバーラタに描かれたクル族の百王子の長男。パーンダヴァ五王子と戦って敗れた。

68. トゥルシーダースは言う、パンディットよ、聞きなさい。ラーマを捨てれば、実に損だ。ガンジス河はガンジスの水がなくなれば、酒のようなありさまになる[23]。

69. ラーマから離れると、幻影(マーヤー)は増大し、心の中におられると分かれば、縮小する。太陽が遠くに見えると、影は長く、太陽が頭上に見えれば、影は足元にあるように。

70. トゥルシーダースは言う、シーターの夫 (ラーマ) である主人に対する愛着が減るや否や、頭上から一目散に幸運は逃げてしまう。

71. トゥルシーダースは言う、コーサラ国の主 (ラーマ) を捨てて、他をあてにするなら、あちこちで不幸に見舞われるだろう。

72. もしラグ族の英雄 (ラーマ) に背けば、ヴィンディヤーチャル山で薪を得られなくなるだろう。海には水がとどまらず、クベーラ (財宝天) の館では断食になるだろう。

73. トゥルシーダースは言う、お前はラーマに背くとどうなるか体感してみろ。雨季の牛糞になるようなものだ。[壁に塗ることもできず、燃料にもならない。] 誰が欲しがるものか、誰が好意を抱くものか。

74. 能力のある者は皆、幸福を与える者を好み、無能な者は、役に立つ者を好む。トゥルシーダースは考えて言う、いかなる時も [官能に溺れる者は] 誰も、ラーマを好まない。

75. トゥルシーダースは言う、ラーマに見守られれば、努力とカルマ (業) がともに実を結び、その者は皆、わが身を顧みず、神を向く。

76. ラーマという如意樹を捨てて、末世という枯木に奉仕し、私欲と最高真理 (解脱) を望んでも、すべての願いは裏切られる。

---

[23]酒は不吉なもののたとえで、ラーマに背けば神聖なものでも不吉なものになるという意味。

[安寧の容易な方法]

77. トゥルシーダースは言う、己の罪とラーマの徳を理解すれば、末世でも二世 (この世とあの世) で、容易に善となる。

78. トゥルシーダースは言う、お前がラーマを好きになるか、主にお前が好まれるか、ふたつのうちで気に入った方をそして容易な方を、お前はすべきである[24]。

79. トゥルシーダースは言う、いかさまはやめて、ふたつのうちでどちらか一方のゲームをしろ。ラーマを愛おしむか、[肉体等に対する] 愛着を捨て去るか。

[ラーマを獲得するための容易な方法]

80. ヴェーダでさえ到達できない主人ラーマは、正しく願えば到達できるのだ。水や食物が、この世ですべての者にとって得やすいものと見られているように。

81. トゥルシーダースは言う、前にやって来た旅人に、あなたは右や左をゆずると、彼はそのようにあなたの左右を歩く。ラーマも同様になさる (ラーマを賞賛する者には賞賛を、背く者にはそっぽをむかれる)。

[ラーマへの愛のために執着心を捨てることの必要性]

82. トゥルシーダースは言う、感覚の対象に背を向けると、ラーマの愛の道が見える。脱皮すると、ヘビの目も開くように。

83. トゥルシーダースは言う、感覚の対象の虚偽が心地よく、甘美であるかぎり、千のスダー (神の飲物) のように美しいラーマへの信仰は味気なく感じられる。

[24] この句でお前と呼びかけている対象はトゥルシーダース自身を指しているとも解釈できる。

[庇護を求めることのすばらしさ]

84. コーサラ国の守護者 (ラーマ) よ、平凡な私は、あなただけのものです。そうなら、三界 [のどこに住もうとも]、三つの時 (現在、過去、未来) に、トゥルシーダースには安寧がある。

85. トゥルシーダースは言う、人々が欠点の蔵と呼んでも、私には、ひとつ長所があります。あなたに対する完全なる信頼です。ラーマよ、あなたの満足に値するはずです。

[信愛のかたち]

86. トゥルシーダースは言う、ラーマを愛し、愛着と怒りに打ち勝ち、倫理の道を進むこと、サントたちの意見では、これこそが信仰の方法である。

87. トゥルシーダースは言う、言葉が真実で、心は汚れなく、行いに偽りがない、ラグ族の誉れ (ラーマ) の奉仕者を、末世は [迷妄で] だますことはできない。

88. トゥルシーダースは言う、幸福なのはラーマによってであり、不幸なのは己の行いによってである [ことを認識している] 者や、カルマ (業) と言葉と心が正しい者を、末世はだますことができない。

[ゴースワーミー (トゥルシーダース) の愛の願い]

89. トゥルシーダースは手を合わせてお願いします。シヴァ神よ、ラーマとの関わり [を持てる人] との関係を、ラーマの愛 [を持てる人] との愛を、いつの生でも与えてください。

90. あらゆる手段にはたったひとつの結果があるのみで、なんとか、心という寺に、ラーマが弓矢を持って住み着いてくださることである。それを知った者が、知者である。

91. ラーマが全世界の王であれば、とてもすばらしい。地上の王であっても、幸運である。[しかしラーマがどんなお方であっても] トゥルシーダースは一生涯、ラーマの御足に愛着を持ち続けたい。

92. トゥルシーダースは言う、たとえ地獄に落ちようとも、四果報 (財、法、愛欲、解脱) という赤子を死という鬼が食らおうとも、ラーマを愛して得られる果報が燃えてしまおうとも [私はラーマを愛し続けます]。

[ラーマ信者の目標]

93. トゥルシーダースは言う、友に対しては友情を、ラーマに対しては愛を抱き、敵に対しては敵意を捨て、すべてに対して公平で誠実であることは、本来あるべき姿である。

94. トゥルシーダースは言う、ラーマに愛おしさを感じ、世間においてはすべてに平等で、愛着、敵意、欠点、悲しみがない、[ラーマの] 僕は、輪廻の海をすでに渡っているのだ。

[目覚め]

95. ラーマを恐れ、ラーマに愛おしさと喜びと信頼を抱きなさい。トゥルシーダースは言う。偽りのない心でラーマのものになれば (ラーマに救いを求めれば)、負けても勝利を得る。

96. トゥルシーダースは言う、慈悲深いラーマに己の長所と短所を話して聞かせなさい。惨めさはやせ衰え、満足感がよく肥える。

97. トゥルシーダースは言う、ラーマを祈念し、奉仕し、ラーマのような主人を見抜くという大いなる利益をも渇望しないなら、それは常に損失である。

98. 知ろうとすることで、分かるようになるのだ。知ろうとせずに、誰が分かるだろうか。トゥルシーダースは言う、これを聞いて理解し、弓矢を持ったラーマを心に抱きなさい。

99. トゥルシーダースは言う。祭祀を行う者は私を木の数珠をかける者 (偽のサント) と呼び、知者は私には知識がないと言う。しかし私は、三つの道 (儀礼、知、奉仕) を捨て、哀れにラーマの戸口で庇護を求めているのだ。

100. すべての者はすべての妨げとなり、達成に導く者には誰もならなかった。トゥルシーダースは言う、慈悲深いラーマから恩寵がある、それのみだ。